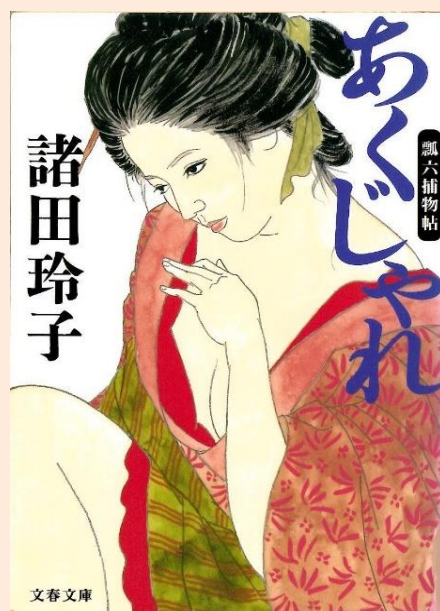


『あくじゃれ—瓢六捕物帖—』 文藝春秋 諸田 玲子／著

ばくちで捕まり、牢内で裁きを待つ瓢六。「実は長崎出身の元役人で目利きである」と知られ、その眼力を見込んだ北町奉行所から、同心・篠崎弥左衛門と組んで難事件の解決に手を貸すよう命じられる。瓢六は鋭い推理力、人脈、財力を駆使し、江戸で起こる事件を次々とひもといていく。



頭が切れるひねくれものの瓢六と、その目付け役となった頭が固い弥左衛門。反りが合わない2人だったが、事件を追う中で徐々に信頼関係を築いていく。不器用な弥左衛門の恋を百戦錬磨の色男・瓢六が手助けする一幕もある。